

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 5



2010 夏

目次

宙……………	長尾京子……………	26
花は葉に……………	富阪宏己……………	24
里静か……………	高城登代……………	22
五月来る……………	角南房子……………	20
芝焼……………	桜本滋子……………	18
いのち……………	小六誠一郎……………	16
輛の初夏……………	奥山登志行……………	14
柏餅……………	梅田光憲……………	12
季節の移ろひ……………	植田桂之……………	10
ルアー……………	岩崎ゆきひろ……………	8
日々是好日……………	井上悦男……………	6
火の道……………	石井宏幸……………	4
そして……………	春・荒木絹江……………	2

色鉛筆……………	名木田純子……………	28
セルを着て……………	信里由美子……………	30
山日和……………	蓮岡健美……………	32
記念日……………	三木瑞恵……………	34
散歩道……………	與田武彦……………	36
花みちて……………	米元ひとみ……………	38
花の昼……………	渡辺牛二……………	40
~~~~~		
星空のランデブー		
……………	富阪宏己……………	42
春隣にて……………	三木瑞恵……………	45
花なき涼しさ……………	石井宏幸……………	47
編集後記……………	渡辺牛二……………	48

## そして：春

荒木絹江

足音も声も傾斜や草紅葉

秋冷の残るベンチの固さかな

日の斑いま紅葉の色に替はりたる

水面映ゆ天守の黒も底冷す

聖樹なるからくりあつけらかんと朝

紋様をデスマスクとす冬の蝶

逆光の池底冷の昏さあり

深呼吸二度三寒の呪縛解く

草焼きの火種の曲りくねる跡

春暁のなま青白き寝返りす

## 火の道

石井宏幸

漂泊の思ひに千切れ鰯雲

風とゆく干底の鯨を追ふやうに

砂の絵のどこか零れて秋の浜

宮は秋沖へ向きゐる常夜燈

殉教の穴を選びて秋の蛇

殉教の地なるを聖母爽やかに

十六夜の皓と澄みゆく帰心はも

火の道を足裏にしるび紅葉寺

火渡の秋の陽薄き雲がくれ

火渡のたちまち烟る秋の寺

## 日々是好日

井上悦男

手に掬ふ瀬戸の小春の波の音  
一列車乗り遅れての日向ぼこ  
雲が雲押して暮れ行く冬の空  
煤払ふ先ずは神様仏様

春立つや妻の手織の機を組む  
帰らぬと決めたる鴨の夫婦かな  
引越しや切り貼り残る春障子  
花ミモザ昨日の雨のまだ重き  
風見鶏春の日差しを廻しをり  
今日だけは本気で喋る万愚節

## ルアー

岩崎ゆきひろ

投げ入るるルアーのしぶき花茨

空広く見ゆる日なるや竹の秋

ふと父のこと思ひ出す夕とんぼ

お互ひの水輪ぶつけてあめんぼう

薔薇の香にかの世の人も集ひけり

鳶鳴けば鴉なほ鳴く夏木立

青鷺の首を伸ばせしその刹那

雨あとの夏草に臥す病猫

胸底につかふる一語草を引く

北壁の尾根に消えゆく岩燕

## 季節の移ろひ

植田桂之

流れ着くところはいづこ流し雛

ムスカリの色鮮やかに雨上る

ひたひたと干潟を浸す春の潮

太陽を月に見せたる黄砂かな

満開の桜を窓に切り取りぬ

窓若葉必ずテレビ見し後に

海沿ひを余花の島々巡りけり

浦里や港に泳ぐ鯉のぼり

駅降りて櫛若葉の街に入り

麦秋の大干拓地日は西に

## 柏餅

梅田光憲

青嵐竹百幹の音あふる

若竹の一本にして青匂ふ

たかんなの鋒ちくと麻袋

筍の皮忽ちに堆く

恙なく生き残りたる柏餅

潮風に棹ひんまげて鯉幟

海風を吐かせてたたむ鯉幟

夜は月へ泰山木の香を捧ぐ

箸置の色もさみどり豆ごはん

万緑や人を小さくしてをりぬ



## 鞆の初夏

奥山登志行

雁木古り光陰覗く蟹の穴

新緑の傾るる瀬戸の潮早し

卯波寄す島の翠黛襞深し

老鶯の喝破に覚めて磴登る

城跡を仰ぐ老舗の飾武具

風薫る海援隊旗なびく鞆

風薫るざんばら髪の龍馬像

夏燕時なしに訪ふ保命酒屋

夏燕視線を繋ぐ瀬戸の情

潮待ちの茶屋にさらりと鰺茶漬

## いのち

小六誠一郎

荒海の鶴とも思ふ八目かな

一瞬の五千の黙や裸押し

木菟に威ありて耳の立ちにける

狼の血を引く犬を足下にす

甲斐犬の熊の臭ひに逆毛立つ

一間の川を飛び越え猪の道

狩人にレンズのやうな野鹿の眼

散骨は丹頂の飛ぶ北の空

熊祭据ゑ置く壇の揺るがざる

マンモスの永き眠りや冬の星

## 芝焼

桜本滋子

芝焼を見る千人の一人かな

名園の区画を埋めてゆく芝火

火の走り風の意のまま芝焼けり

松の辺の芝焼く炎消されつつ

火の怖さ語り芝焼見てをりぬ

潮よする如く芝火の迫りくる

緩急を見せて芝火の焼き移る

芝焼の煙の中の声走る

芝焼の跡は烏城と対の色

末黒野と化したる園の暮れゆけり

## 五月来る

角南房子

玻璃戸より声の透け来る遠蛙

水切りの石を探して春の湖

風に散る緑の粉や土筆摘む

春眠の魚に目蓋のなかりけり

潮騒の音にくづれし牡丹かな

ジーンズの君颯爽と五月来る

草笛の一枚といふ音色かな

沿線の車窓振り分け麦の秋

黒揚羽木洩れ日をでて光りけり

豆飯の香りふくらみ炊き上がる

## 里静か

高城登代

鮒はねて子連れの影や水温む

うかれ猫三泊四日家出する

青田風百姓の背をねぎらうて

草笛の朝の光に透き通る

蔭探す猫の風太の薄暑かな

黄鵪鴿白鵪鴿の舞台なる

待ちわびて酔芙蓉けふ美しき会

夜焚火の人のうしろの暗さかな

海荒れて旅人と飲む冬のバー

里静か冬鳥たちの影を見ず

## 花は葉に

富阪宏己

雛店と仏具の店と相對し

春の空深きに鳥の溺れをり

静寂の吹き上げらるる山桜

黒潮を引きずつてゆく月朧

花は葉に動かぬ幹のありにけり

夏は来ぬスピカの窓を置き去りに

葉桜や水豊かなる星に住み

月見草ときには星を見てをりぬ

風薫る葉裏葉表色違へ

病窓に時鳥聞く夜雨かな

## 宙

長尾京子

由加古道よき空のあり初詣

とうふだま器量よきかな針供養

春浅し鳶のすひあげらるる宙

春雷や乙女のごとき一つきり

ありがたや遍路助けの渡し舟

海渡り会陽の声の届きしや

足摺の波打ち返す会陽かな

ひしめきてふどし一筋裸押し

万愚節ダイヤモンドの贈り物

すくすくとミモザに似たり真奈十二

## 色鉛筆

名木田純子

黄砂ふるパールバックの大地より

日当りて赤日翳りて椿あか

菖蒲田に紫といふ連鎖あり

一枚の緑に流れ牧場風

子午線の通る島なり銀河濃し

さはやかや白き器の花サラダ

露草の滴一滴に瑠璃深し

案山子立つ青ボタン目にチロル帽

金風を連れて島より渡し来る

黒帯の気迫の声や冬に入る



## セルを着て

信里由美子

木洩日を揺らす木洩日初夏の風

木洩日と別のさゆらぎ小判草

小判草風の径より音零し

風の層重ね透けゆく若楓

みよし野の谿七彩に若葉雨

石楠花の蒼く昏れゆく谿の宿

夕風のふはりとやさしセルの袖

セルを著て昔の風でありにけり

銘仙もセルも解かれ夜の灯影

セルを縫ふ昭和の家の昏さかな

## 山日和

蓮岡健美

春の泥つけて山より帰りたる

タイトルは「街」と決めたり花ミモザ

俄雨暑気を返して地を叩く

その汗を浴びたる如く拭きにけり

地図広げ秋日寄せたる現在地

雨音の落葉をたたくリズムかな

咲き継ぎてカンナ通りとなりにけり

頬被清く正しく爺寝まる

体調を整へをくも年用意

悴みて言葉となりてをらざりし

## 記念日

三木瑞恵

アベックの自転車風切る桃の花  
からたちの棘の隙間の花の白  
山桜とびとびに又かたまりて  
花の旅終る別れの手を振つて

記念日や薔薇一輪に祝はるる  
牡丹園一輪づつの遅速かな  
日に高くたんぽぽの絮風を待つ  
山路の一叢の香に踏み込みぬ  
隠沼を狭めて叢の花茨  
蓮巻葉突き出してゐる水平ら

## 散歩道

與田武彦

酒やめて浅蜷酒蒸し舌つづみ

鴨川の永井の里のほたる狩

糸蜻蛉ゆつくり飛んで何してる

秋草や空にトンビが輪を描く

色鳥が北の国から顔見せる

空高く皇帝ダリア咲きにけり

柚子風呂に静かに入る我が身かな

仕事の間後楽園の春寒し

春雷を待つこと久し今年かな

ミモザ咲き鳥の声聞く散歩かな

## 花みちて

米元ひとみ

落日にあす初花といふ蒼

富士淡くうかべ岬の初桜

ほつそりとして抜け道の桜かな

島ひとつ鹿の子しぼりや山桜

花みちて風を殺してゐたりけり

ゆく雲の小舟となれり花の空

花びらは大樹の幹をつたはりて

ひとひらがさそふ一樹の花吹雪

花の風鳶を酔はせてゐたりけり

珈琲の香の中にゐる花疲れ

## 花の昼

渡辺牛二

遠景の一両電車朝桜

霞とも雲とも花の山遠く

咲き初めし枝よりゆるる糸桜

花万孕空に日陰のなかりけり

一雨に葉の青見せて桜散る

雨一夜水の形に花の屑

飛花落花かつてに開く自動ドア

定年などどふでもいいや花の昼

咲き満ちて花に行場のなき心

限りなくでも限りある落花かな

星空のランデブー

富阪宏己

入院七日目の病窓は雨であった。夜が更けるにつれて、風が強まり、雨は横なぐりに窓を打ち始めた。

肺炎で入院した当座は、高熱にうなされるばかりで何も見えなかったが、三日目に入り平熱に近づくにつれ、部屋のたたずまいが見えるようになった。

その頃、個室から大部屋へ移された。六人部屋だった。

「入り口のベッドと、奥のベッドが空いてますが……」

言われて奥を見ると、一面、透明ガラスの広い窓が見えた。

「奥がいいです」

窓際のベッドに横たわると、目を刺すような新緑

が飛び込んできた。

小高い山に建つ総合病院だけあって、眼下に街並みと田園が広がって見えた。

点滴に自由を奪われた患者は、窓を見るのが日課である。切り取られた、一つ枠内の景色を見るのは退屈そのものだったが、目を凝らして見つめていると、風に吹かれる新緑の様子、それを追いかける光の反射、太陽をさえぎる雲の色や形。何もかもが、微妙に変化し、それぞれがつながりあっているのだった。

朝、見る街。昼間、見る街。夕方、見る街。街は別人のように表情を変えていく。

昼の検温に來た看護師に

「アフリカの街みたいだ。夕方になると、スイスの街に似てくるんだよ」

「よく外国旅行に行かれるんですね」

「いやいや、一度も行ったことない」

看護師が僕の禿頭をポンと叩いて出てゆくと、街

は黄砂に霞んだ中国の街に見えてきた。

そのとき、入り口のベッドへ徳山さんが入院してきた。六十過ぎの長身の男だ。

看護師とのやりとりが聞こえてくる。

「大勢、女性の方が付き添ってましたけど、ご親戚の方ですの」

「まあ、大体が……」

「大体がつて？」

「一人は違う」

「奥様ですの？」

「女房は死んだよ」

「じゃあ、お知り合いの方ですの？」

「知り合いと言うか、お互いの家を行ったり来たりして、一緒に暮らしとるようなもんじゃ」

「うわあ！ 婚約中なんだ」

「いやいや、再婚はせんよ」

「もったいないわ。あの素敵な方なんでしょう」

「なんとゆうか。それぞれ、別な仏壇があるし。」

それぞれ、連合いと築いた家もあるし」

「格好いい！ ボーヴォールとサルトルみたい」

「そんなじゃないよ。阿呆な男と馬鹿な女が、気持ち寄せとるだけじゃ。年取って独りは寂しいからなあ」

やりとりを聞きながら、僕は徳山さんが好きになつてしまった。

翌朝、徳山さんが看護師に叱られる声が聞こえた。

「徳山さん、これは何」

「オシッコ」

「痰の検査つて言つたでしょ」

「うっかり聞き逃した。どうも穴が小さいと思うけれど」

「どうやって採つたの」

「いやあ、実演は勘弁してよ。わし、阿呆なんじゃ。徳さん、徳さん、言うてもええけえ」

今、雨音をかき消すほどの、徳さんの鼾が部屋

中に鳴り渡っている。リズムカルに、強弱をつけて。

その夜だった。徳さんと宇宙を旅した夢を見たのは。

「どうやら、大気圏を出たようだな」

「無重力？」

「いやいや、星の重力が働いてる」

そう言うと、徳さんは両手両足を伸ばし、一本の棒のようになった。

「速度を上げるための姿勢？」

「そうだよ、こうして太陽系を出たい、太陽系を出たいと念じるんだよ」

「太陽系を出て何処へ？」

「そうだな、とりあえずアンドロメダ銀河だな。

二三〇万光年先だ。スピード上げるよ」

「分かったよ、徳さん。でもなあ、人は皆んな、本当に宇宙でいつまでも生きているのかい」

「そうだよ。紫式部も、小野小町も、どこかの星

で暮らしてるんだ」

「徳さんは誰と逢いたいんだい」

「そりゃあ、小野小町だよ。あんたは」

「初恋の人。中学校の時の音楽の先生。でも、今じゃ大変なお婆さんだろうな」

「大丈夫。大丈夫。宇宙では不老不死。その人が一番綺麗だったときのままだ」

青白いスピカが眼の端を過ぎ、前方に赤いアンタレスが見えた。

「早く逢いたい。徳さん、急ごうよ」

「それがなあ、宇宙ケイタイも、宇宙ナビも忘れて来たんだよ。宇宙は広いからなあ」

「そんな馬鹿な」

あまりの情けなさに、泣きたくなった。無限の星と、無限の先祖たち。力を抜いて振り返っても、地球の存在すら、おぼつかない。

(Vol.6 へつへつ)

## 春隣にて

三木瑞恵

お正月を迎えると急に春を意識します。

町も華やかに飾られ春の雰囲気になり満ち溢れていて、心わくわくします。

お花屋さんも春の花がずらりと勢揃いです。

でも、現実はまだまだ厳しい寒さの真っ只中で、我家の窓から見えるものと言えば、殺風景な枯色の田畑と、どこも固く閉ざして動かない家々と、すっかり色を失っている遥かな山並みの沈黙の世界です。

しかしその中にも少しずつ日差しの明るさが見えてきて、確実に季節が動きつつある事を実感させてくれます。

お正月のもろもろの行事を経て、春へと移りつつある貴重な時間の様に思われます。

炬燵に猫と背を丸く過ごすのも昔から日本の冬

の風物詩ですが、私も炬燵が大好きで、今日もその中で、春二月の歳時記をひもといてみますと、おおよそ七十四の季題が載っており、副題も数えますと、その倍以上もの季題に出合うことができます。

今さら驚くのも変ですが、それら季題に対して多種多様と名句が詠まれているのです。

「よくこんなに詠めるよネエ！」

内心思いながら、一句一句に感動をもらっています。

日本人ならではの繊細な感覚と感性が、これら数多くの詩を誕生させている事に、しみじみと思いを馳せるのです。

大勢の俳人達の心の結晶だと思いながら。

こんな事を書きながら凡人の私ごとですが、俳句に嵌ってしまっているのは、やっぱり大自然の四季の移ろいを季題と共に飽くこともなく楽しませてもらっている事の他にありません。



先日も池に氷が張っていて、数羽の鴨が陸に身を寄り添って寝ていましたが、日差しが出て氷が解け出すと嬉々と泳ぎ廻っていました。

見ていて楽しくなりました。  
「氷が解けたら何になる?」「春になる」  
もうすぐほんとうの春ですね。

心が躍ってきました。

H22年1月記



## 花なき涼しさ

石井宏幸

海辺まで花なにもなき涼しさよ

飯田龍太 句集「遅速」より

福田甲子雄編著「蛇笏・龍太の旅心」によると、  
「平成元年五月十五日玉野市の瀬戸大橋を望むホテルに宿泊。早朝、海辺まで散策するが目につく花は何もなかったことに、山国とは違った涼しさを肌で感じる。」とある。

私は、父の転勤のため、中学一年生の夏に、広島県竹原市から玉野市へ引っ越した。まず住んだのが渋川にあった長屋のような社宅であった。知らぬ土地に来て母が翌日洗濯をしながら泣いていたことを覚えている。私は、弟と毎日のように海水パンツ姿で家を出て、海岸の端から端まで泳ぎ、飛び込み台に上がっては目の前の四国を見て

いた。

渋川は一言で言うとも県下一の白砂青松の浜であり、その浜に隣接してホテルは建っている。浜に出てしまえば、砂と波と沖を行く船、大槌小槌の島、そしてその向こうの四国を目の当たりにしたはず。それは森の深さ、混沌とした緑やその影の深さの持つ涼しさと違って、きらめく光による、ある意味において単純化した構図による涼しさではなかったか。松の緑を背にした四国を見通す広がりの中で、光が潮風となり、龍太の肌を吹いたのではなかったか。

それは、中学生だった私が飛び込み台の上で吹かれた時の肌感覚、そして記憶の中での海の広がりとなりあう。

五月の渋川ならば、日本一長いと言われる藤棚も見てほしかったけれども。

◆西東三鬼の随筆「秋の暮」に刑務所が出てきます。その跡地にサーカスがやって来たのは、私が津山へ来て三年ほど経った頃の春でした。

◆サーカスの会場設営というアルバイトがありました。条件も良かったのですが、それ以上にサーカスで働くことは魅力に満ちていました。

◆会場の一角には、既に団員達の質素なプレハブの住居が建ち、猛獣たちの入ったコンテナが窮屈そうに並んでいました。姿は見えないのに動物の気配が溢れているのです。

◆洗濯ロープに干された衣装は、空中ブランコの華やかさとは裏腹に、近くで見ると意外と疲れていたりしました。

◆サーカスの方達は皆優しくて、大

きな家族のようでした。その中には、子どもの頃の記憶にある、あのおじさんの姿もあったのです。

◆構造までは覚えていませんが、アルバイトも団員も総出でロープを引っ張ると、中央に建てられた二本の塔を中心に、あの巨大なテントがゆっくりと立ち上がって行きました。

◆サーカスが来る度にこの時のことを思い出します。私の宝物のようなアルバイトの記憶です。

◆アンソロジーとは全く関係の無いことを書いてしまいました。

こんなことを書けるのもこの号が順調に仕上がったからで、皆様のご協力に感謝しています。

ありがとうございます。

サーカスのキリンの首の夏もやう

(牛二)

## アンソロジー合歓 Vol.5

平成 22 年 8 月 1 日 発行

発 行 合歓の会

発行責任者 富阪宏己

印 刷 弘文社

岡山県津山市

連絡先

〒 701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

次号締め切り

平成 22 年 11 月 30 日

原稿送付先

〒 708-0015

岡山県津山市神戸 719-7

渡辺牛二

Email : info@nemu819.net

Tel. : 090-8710-7067